

世界の茶の文化セミナー

— 世界のお茶おもてなし「一期一会」席 ふれあひトーク —

「堺伝授」—中世の文化センターとしての“三国ヶ丘”

和歌山山大学名誉教授・前堺市博物館長・堺市教育委員会顧問
経済学博士 角山 榮

応仁・文明の乱(1467～1478年)で荒廃した京都に対して、当時は堺は日本一繁栄した豊かな都市であり、しかも文化的な暮らしが保証されている安全な場所でありました。だから文人たちの多くは戦禍の京都を避けて堺へ移り住みました。人ともに文化もまた堺に移り、堺の庶民の間では、貴族たちのたしなみでありました和歌や連歌が流行するなど、堺は文化の香りの高いまちになっていきました。

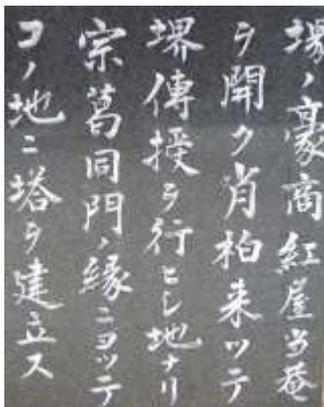


その文人の一人として牡丹花肖柏(1443～1527年)がいました。肖柏は、1518年北摂(池田)の地が戦乱となったため堺に移り豪商・紅谷喜平の世話になり堺(現在の中三国ヶ丘町「紅谷庵」)、つまり本日の第3回セミナーを開催しているこの地に移り住み和歌や連歌の指導を始めました。「堺伝授」の詳細は、西田先生より学問的にお話がありましたので深くは入りませんが、肖柏は東常縁(とうのつねなり)から「古今伝授」を受けた宗祇に学び、古今和歌集の伝授を受けました。それは、西田先生のお話にありましたように「堺伝授」としてこの地でさらに教養が豊かで文芸に親しむ堺の町人衆に伝えられました。



曹洞宗 天皇山「紅谷庵」山門 (中三国ヶ丘町)

千利休(1522～1591年)により堺で「茶の湯」が大成されましたが、「茶の湯」の文化は飲茶の系譜の中でのみ誕生したわけではありません。京の都を除けば、都に相応して広く文化的背景を持っていた堺衆がいたからこそでした。肖柏は、その文化的な“まち衆”を育てる役目をこの三国ヶ丘の



地で担っていたのですが、残念ながら、現在、堺ではあまりこのことは知られておりません。

一方、岐阜県郡上市では古今和歌集伝授の祖・東常縁居城の一角を「古今伝授の里フィールドミュージアム」と名付け文化遺産として観光に活かし、まちづくりを進めております。中世の堺の文化センターとして人材を育て文化を発信したこの「三国ヶ丘」が「世界の茶の文化セミナー」の第3回目として位置づけられ論じられた機会に、この地にまつわる伝統文化として新たな時代に活かし堺の文化発信の地として蘇らせることを提案し期待します。

『堺鑑』著者 衣笠一閑供養碑裏書き(紅谷庵境内)